

# 平成30年度いばらきっ子郷土検定問題 解答と解説

## 下妻市 解説

組	番	氏名
---	---	----

番号	解 説	答
1	下妻市には、国蝶に指定されているオオムラサキの生息地があり、市が保護活動をしていることもあり、オオムラサキをイメージしたキャラクター「シモンちゃん」が誕生しました。	4
2	筑波根詩人として知られている横瀬夜雨の「やれたいこ」の詩碑は、小貝川堤防上にあります。	1
3	1577年(天正5年)に建造された大宝八幡宮本殿は旧県社であり、祭神は誉田別命(ほんだわけのみこと)(応神天皇)・足仲彦命(たらしなかつひこのみこと)(仲哀天皇)・気長足姫命(おきながたらしひめのみこと)(神功皇后)の三柱です。世界的にみると、イングランド人のフランシス・ドレークが世界周航を開始したのが1577年(天正5年)です。	3
4	毎年、市内の山車や神輿が一堂に会し、沿道を練り歩くふるさとまつり連合渡御(れんごうとぎょ)が開催されます。	4
5	毎年、4月第2日曜日に多賀谷城跡公園を会場に、戦国武将・多賀谷氏をしのぶ、多賀谷時代まつりが開催され、火縄銃砲術演武や手作り武者行列などが行われます。	2
6	下妻市は全国でも有数の梨生産地で、7月上旬から幸水を皮切りに、豊水、あきづき、新高、豊水などを生産しています。	1
7	市内には北から、騰波ノ江駅、大宝駅、下妻駅、宗道駅の4駅あります。	2
8	下妻まつりは、毎月8月第一土曜日に開催される市内最大のお祭りです。市内外から集まった1,000名を超える踊り手が行列を作りながら、「下妻シッコメ」や「下妻音頭」などに合わせて踊ります。	2
9	砂沼周辺には約1,000本の桜が植えられており、4月には桜まつりも開催されます。	3
10	柴崎1号墳は、全長65メートル、高さ6メートルの前方後円墳で、4世紀後半につくられたものと考えられています。柴崎古墳群は八千代町仁江戸古墳群と同一の古墳群を形成し、最古級の前方後円墳に位置づけられています。	1
11	ピアスパークしもつまの温泉は、地下1,500メートルより湧き出たアルカリ性の天然温泉で、露天風呂や薬湯風呂など7つのお風呂が楽しめます。	4
12	本宗道の宗任神社の裏側にあることから、宮裏両樋(みやうらりょうひ)と名付けられました。1900年(明治33年)に建造されたレンガ造りの分水施設です。	2
13	茨城の百選にも選ばれている、砂沼広域公園は、沼を中心とした80ヘクタールの広大な自然公園で、沼の周囲は約6キロメートルの遊歩道がある。	3
14	市村緑郎は1936年(昭和11年)生まれで、東京教育大学(現:筑波大学)を卒業後、埼玉大学教授などを務め、2006年(平成18年)に日本芸術院会員賞を受賞され、2008年(平成20年)に日本芸術院会員となりました。	2
15	門井八郎は下妻市渋井出身で、詩家佐藤惣之助の門に入り厳格な指導を受けたあと、長谷川伸門下となって小説を学びました。後に作詞家となり三波春夫の「チャンチキおけさ」や「船方さんよ」、アイ・ジョージの「赤いグラス」などのヒット曲を手がけました。	1
16	2000年(平成12年)に「関東の駅100選」に選ばれた騰波ノ江駅は、下妻市若柳乙にある関東鉄道常総線の駅で、相対式ホーム2面2線を有する地上駅です。	4
17	別名「冬瓜まつり」とも呼ばれているタバカ祭は、1370年(応安3年)に大宝寺別当坊の賢了院が出火した際に、「畳」と「鍋ぶた」を使い火を消したという故事を戯曲化したものといわれています。	4
18	しもつま砂沼フェスティバルは、郷土芸能、特産品、工芸品など紹介する場を提供し、市民の多くの方々会場に訪れ、楽しんでおります。	2
19	下妻市のスポーツ大会の一大イベントとして砂沼遊歩道を中心としたコースで開催される砂沼マラソン大会は毎年、多くの市民ランナーが参加しています。	3
20	現在の下妻市は2006年(平成18年)旧千代川村と合併し、80.88平方キロメートルになりました。	1
21	下妻市は、2012年(平成24年)に災害時において、人材・物資等の応援を行う協定を千葉県、浦安市と結んでいます。	4
22	2017年(平成29年)に梨の輸出がベトナムにおいて解禁されました。それに伴い全国有数の梨の産地である下妻市において、輸出されました。販売目的で輸出するのは茨城県で初めてです。	2
23	通常の幸水は樹上で開花後115日で収穫するところ、下妻甘熟梨は125日前後で収穫することにより、十分に熟することで梨本来の糖度と風味を持たせています。	3
24	下妻市は2006年(平成18年)1月1日に旧千代川村と合併しました。	4
25	市章は1954年(昭和29年)7月1日に制定されました。「下」の字に躍進の意味をこめて右上がりとし、躍進にともなう行き過ぎと闘争を自覚して、円満協調を図らなければならないという意味を含んでいます。	3